

キャンパスライフに埋め込まれた学習

何が入社後の適応 活躍をもたらすのか？



若手社会人の不適應、迷走。

採用面接では、あんなに優秀だったのに？

演技？ いや、それだけではない。

彼らの大学生活の実態を追うと、

適応・不適應をもたらす

経験・学習の特徴が明らかになってきた。

若手社会人が迷走している。

貴重な戦力、将来の幹部と期待されて入社しながら、

職場や仕事に不適応を起こし、早期離職、うつ病発症、そんな例がひきもきらない。

有名企業の新人・若手など、活躍が期待された人材により

顕著な現象であることも問題を複雑にしている。

この要因を、日本企業の旧弊な年功序列システムに対する幻滅と喝破する意見がある。

あるいは就職活動に過度にコミットしたことによる偏狭なキャリアイメージの呪縛とする声もある。

では、それより前の期間はどうか。

「受動的な環境適応」から「主体的な環境適応」への切り替えが求められる大学時代の過ごし方が、実は大きな影響を及ぼしているのではないだろうか？

大学生活での経験や気づきのありようが、

会社に入ってから適応・不適応に影響を及ぼしているのではないだろうか？

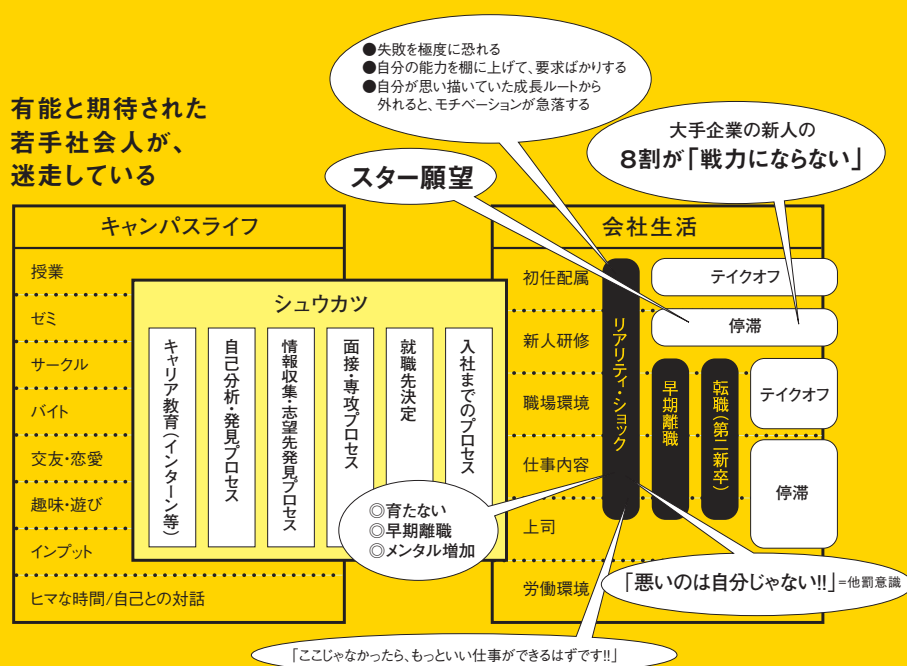
インタビューを重ねていくと、適応・不適応それぞれに、

いくつかのパターンに分類できることが分かってきた。

そして、適応している人と迷走する人とは、

「キャンパスライフでの学習」に明確な違いがあることが浮き彫りになってきた。

ここに、その全貌を紹介したい。



32人のインタビューによる実態探索

とある有名私立大学。その卒業生32人へのインタビュー。入社してから今に至るまでの仕事状況、職場での人間関係等々、そして、大学時代のさまざまな経験、エピソードを、詳細にわたって聞き込んでいった。

インタビューリスト

取材者ID	初期 適応/不適応	初職の勤務先	大学生生活満足	大学時代に注力した活動			
				勉学	クラブ・サークル	アルバイト	就職活動
1	不	不動産	まあ満足	△	◎	◎	◎
2	適	印刷	まあ満足	△	◎	△	○
3	不	不動産	まあ満足	×	◎	○	◎
4	不	フードビジネス	まあ満足	△	○	◎	△
5	適	総合電気	まあ満足	◎	◎	◎	○
6	不	ビジネスフォーム	とても満足	○	×	○	×
7	適	広告	まあ満足	△	◎	◎	○
8	不	不動産	まあ満足	◎	◎	△	×
9	不	通信	とても満足	△	◎	○	◎
10	不	旅行	まあ満足	×	◎	○	×
11	不	情報システム	とても満足	◎	△	○	◎
12	適	情報システム	まあ満足	×	○	◎	○
13	不	都銀	とても満足	◎	△	×	○
14	適	都銀	まあ満足	◎	◎	○	○
15	適	外資IT	まあ満足	△	◎	○	○
16	不	通信	とても満足	○	◎	△	○
17	適	電子部品	まあ満足	×	◎	○	◎
18	適	医療機関	まあ満足	△	◎	×	○
19	不	外資IT	とても満足	◎	×	○	○
20	不	IT	まあ満足	△	◎	×	○
21	不	証券	とても満足	◎	○	○	○
22	不	印刷	とても満足	×	○	△	△
23	適	精密化学	やや不満足	△	×	○	◎
24	適	制御計測機器	とても満足	△	△	◎	○
25	適	アミューズメント機器	全く不満足	△	△	○	△
26	不	情報システム	とても満足	△	◎	○	△
27	適	情報システム	まあ満足	△	○	○	○
28	適	オーディオ機器	やや不満足	○	△	○	△
29	適	印刷	どちらともいえない	○	○	○	○
30	適	損害保険	まあ満足	◎	△	△	◎
31	適	鉄道	どちらともいえない	△	◎	○	○
32	適	通信	やや不満足	○	×	◎	○

インタビュー調査概要

◎対象:入学偏差値60台のA大学の文科系学部の卒業生のうち、下記に該当する32名

- 社会人になって4年目～6年目
 - 卒業後すぐに民間企業に正社員として就職
 - 初職の会社の従業員規模が1000名以上
- *大学生生活への満足度が高く、就職活動にも首尾よく成功した人が中心

◎インタビュー内容

- 初期適応＝大学卒業後、新人・若手社員として働いた初期(1～3年間)の適応状況
 - キャンパスライフでの学習＝ゼミ・講義などの勉学、クラブ・サークル活動、アルバイト、就職活動での行動・経験・およびそこから得られた気づき
- *社会人後の適応状況に関する詳細記述を事前に依頼

◎インタビュー実施・結果の精査

- 二名でインタビューを実施
- 適応状況、キャンパスライフでの学習については、インタビューの発言をベースにしながらも、インタビュー全体およびこれまでの研究資産をもとに、総合的・相対的な解釈を施した

インタビュー解析から構築された視界

32人のユニークなストーリー。
そのストーリーを解析していくと、
初期適応・企業選択は4つの視点として、
キャンパスライフでの出来事から
得られているものは、
13の学習として整理された。

初期適応の4視点と 企業選択の重視点

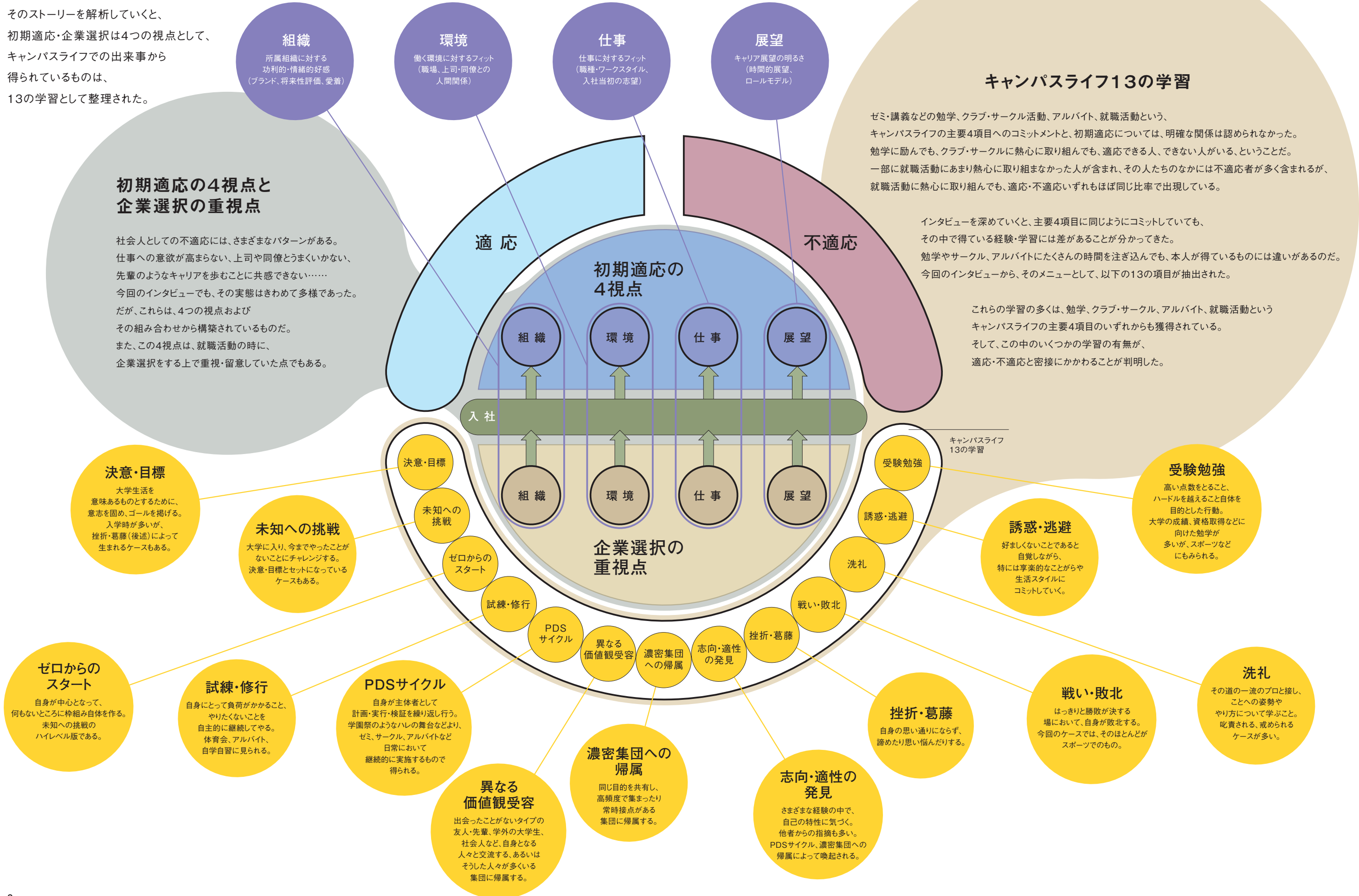
社会人としての不適応には、さまざまなパターンがある。
仕事への意欲が高まらない、上司や同僚とうまくいかない、
先輩のようなキャリアを歩むことに共感できない……
今回のインタビューでも、その実態はさまざまであった。
だが、これらは、4つの視点および
その組み合わせから構築されているものだ。
また、この4視点は、就職活動の時に、
企業選択をする上で重視・留意していた点でもある。

キャンパスライフ13の学習

ゼミ・講義などの勉学、クラブ・サークル活動、アルバイト、就職活動という、
キャンパスライフの主要4項目へのコミットメントと、初期適応については、明確な関係は認められなかった。
勉学に励んでも、クラブ・サークルに熱心に取り組んでも、適応できる人、できない人がいる、ということだ。
一部に就職活動にあまり熱心に取り組まなかった人が含まれ、その人たちのなかには不適応者が多く含まれるが、
就職活動に熱心に取り組んでも、適応・不適応いずれもほぼ同じ比率で出現している。

インタビューを深めていくと、主要4項目に同じようにコミットしていても、
その中で得ている経験・学習には差があることが分かってきた。
勉学やサークル、アルバイトにたくさんの時間を注ぎ込んでも、本人が得ているものには違いがあるのだ。
今回のインタビューから、そのメニューとして、以下の13の項目が抽出された。

これらの学習の多くは、勉学、クラブ・サークル、アルバイト、就職活動という
キャンパスライフの主要4項目のいずれからも獲得されている。
そして、この中のいくつかの学習の有無が、
適応・不適応と密接にかかわることが判明した。



初期適応とキャンパスライフの密接な関係

32人のストーリー構造を分析・抽出すると、適応には三つのパターンが、不適応には5つのパターンが浮かび上がってきた。そして、そのパターンごとに、キャンパスライフの学習には違いがあることが見えてきた。

初期適応	初期適応状況	就職時の重視点 ● 不適応点				キャンパスライフの学習													
		組織	環境	仕事	展望	決意目標	未知の挑戦	ゼロからのスタート	試練修行	PDSサイクル	異なる価値観受容	濃密集団への帰属	志向適性の発見	挫折葛藤	戦い敗北	洗礼	誘惑逃避	受験勉強	
適	入社前に感じていた通り「いい人の多い会社」		●						○	○	○	○	○						
適	仕事はうまく回らなかったが、上司がサポート。温かく育ててくれる風土は予想通り。		●			○	○			○			○	○		○			
適	想定職種ではなかったが、問題なく順応。		●				○			○			○				○		
適	二年目で副支店長抜擢、会社が民事再生で続かなかったが。	●	●			○			○	○	○		○	○				○	
適	社内人脈作りで苦労しつつも、ロールモデルとなる部長から直接指導	●	●						○	○	○	○	○	○	○	○	○		
適	配属は意図と違ったが、交渉によりすぐに意中の仕事を獲得。	●		●		○	○			○	○		○	○	○	○			
適	配属職種にはギャップがあったが任せてもらい主体的に。	●		●		○	○			○	○		○	○					
適	常に対処するか考えている。	●			●				○			○	○	○					
適	配属ショックも、上司の強力サポートを得て主体的に対応。	●	●	●	●	○	○			○	○		○	○					
適	下積み仕事も割り切り楽しむ。	●	●	●			○			○	○			○	○				
適	仕事に恵まれず転職活動するも、その活動によって自社を再評価。	●	●							○	○	○	○					○	
適	自己鍛錬モードで初期から成果。三年目に役員表彰。	●	●	●						○	○	○	○						
適	初期から成果を出し、トップセールスに。	●	●			○	○	○		○	○	○	○		○	○			
適	優秀で妥協のない先輩に鍛えられ、仕事の基本姿勢を身につける。	●	●	●			○	○		○	○	○	○	○	○	○			
適	新人トップ業績、4年目に事業部最年少でリーダーに抜擢。	●	●	●	●					○		○	○						
不	渉外業務で成果上げても仕事・同僚の仕事姿勢にフィット感なく、3年目に転職。	●	×							○	○			○	○				
不	上司・メンターと衝突。研修と実地の乖離にも違和感。	●	×							○							○		
不	報告・連絡・相談について、上司から叱責を度々受ける。これだけ怒られるのは人生初めて。	●	×		●	×	○	○											
不	知識が必要な営業に苦戦。上司からの「いじめ」も。	●	×	●			○	○											
不	成長、スキルアップへの焦燥感から、腰が落ち着かない。	●			●	×	○			○		○					○		
不	営業成果上げるも、「自分を売り込む」営業に面白みを見出せず。	●		●	×	×	○			○		○		○					
不	初任業務にギャップ、同期との待遇差に不満。上司との軋轢も。	●	×	×			○	○	○		○		○					○	
不	想定外の間接部門で、仕事の意味を見出せず。		×	●	×	●	○	○			○						○		
不	業務遂行に当たり、上司から度々怒られる。	●	×	●			○	○				○							
不	自身が掲げた目標に近づけない焦りで揺れている。	●			●	×	○					○						○	
不	時間経過とともに仕事への違和感が増大。		●	×	●	×	○	○				○						○	
不	ブラック企業と認知し早期離職。	●	×		×			○		○		○							
不	仕事に興味わかず早期離職。	●			×					○		○						○	
不	期待と実態のギャップに落ち込む。コース選択も間違えた。	●		●	×	●	×	○		○								○	
不	営業で成果を出せず監査部門に異動。	●		●	×	●	×			○								○	
不	職場ののんびりした雰囲気には馴染むが、仕事に主体的にコミットできない。	●	●	×														○	
不	営業の仕事に適応できず、うつでの休職後に異動。	●	×	×						○		○						○	
適	初期適応者の集計値	●	12	12	7	3	6	9	3	9	12	11	10	6	12	7	6	3	0
不	初期不適応者の集計値	●	15	2	5	8	10	8	1	5	4	2	9	1	2	1	2	5	4

8つのシンボリックストーリー

学生たちは、キャンパスライフをいかに旅立ち、旅し、帰還するのか。

これから8つのストーリーをご紹介します。

晴れて大学入学を果たし、さまざまな経験をし、卒業し、就職し、会社・仕事に対峙していくストーリーだ。ストーリーの提示に当たっては、J.キャンベルの名著「千の顔を持つ英雄」の枠組みを活用しよう。キャンベルは、すべての英雄伝説に、

「セパレーション(旅立ち)-イニシエーション(通過儀礼)-リターン(帰還)」

という共通した骨格があることを、世界中の膨大な物語の解析を通じて立証している。何がしかの誘因により故郷を旅立ち、目的を達成する旅をする中で、さまざまな苦境…つまりは英雄になるための通過儀礼…を乗り越えて成長し、ついに目的を遂げて帰還する。「スターウォーズ」は、この文献をもとにして作られた、という逸話もある。

一人ひとりの大学生は、決して英雄とは言えない。

しかし、一人ひとり、大学への入学という旅立ちによって、新たな世界へと足を踏み入れ、高校時代までとはまったく異なる環境のなかで、これまでにない出来事=通過儀礼に遭遇し、それらを通して、新たな自己を形成していく。そして、新たに形成された自己は、就職活動という最後の通過儀礼を経て卒業後の進路を獲得し、卒業=帰還する。

彼らは、彼らなりの「英雄伝説」を生きているのだ。

その「英雄伝説」が真の英雄伝説足りうるものだったのか。

キャンパスライフでの学習が良質のものであったのか、

そうではなかったのか。それが問われるのは、社会人としてデビューしたのちである。

そして、初期の社会人生活・経験は、その人の職業人生のありようを大きく左右する。

8つの「英雄伝説」は、キャンパスライフに埋め込まれた学習を読み解くシンボリックストーリーである。

「就活は、人に会いながら実践的に学んでいった感じ」
 「ゲームしかやらないサークルなんて温すぎ。自分たちでサークルつくる？」
 「黒字になったら面白いな。会社だと思って運営してみよう」
 「いろいろな人がいるのは楽しい。好き嫌いなくはないけど付き合ってみると楽しい」

ゼロからやり遂げ体験、 多彩な交流により、 環境適応能力が発達。

能崎クンのストーリー

【セパレーション】

一浪で第二志望の大学に合格。1年間十分頑張った上での結果だし、受験勉強から解放されることもうれしかったので、晴れ晴れとした気分での入学。高校から同じ大学に入った友達も割と多かったのも、特に大学生活について決意したりすることなく、自然に大学生活がスタートした。

高いレベルに挑戦したい、という意向から浪人しているが、結果に対しては落ち込んだりひがんだりせず、素直に受け止めている。

【イニシエーション】

大学ではとりあえずサークル探しをした。どうせやるなら新しくおしゃれな感じがいいと思ったが、どれもありきたりな感じがしたので、自分でサークルを作ってしまうと思いつく。以前テレビで見て興味を持った「アルティメット」。フライングディスクを使って競技するアメフトとバスケットをあわせてようなめずらしいスポーツで大学にまだなかった。最初に取り組んだのはメンバー集め。授業に出席している人を見つけては勧誘して回ったので、女子や真面目勉強系の男子にまで顔が広がった。授業はそれほど真面目に出ていなかったが、おかげで後々テスト勉強で困ることはなかった。

サークルの運営は、主に1年前に現役で入学している高校同期の人脈から学んだ。2年目からは、他大学に声をかけてイベントや大会を開催したり、協賛企業を開拓して開催規模や賞品を豪華にしたり年々工夫を加え、大きなイベントにしていった。

企業への営業活動は自分を鍛えるいい経験になった。何度も断られたが、企業にとってのメリットを必死に考えていくうちに、だんだん手答えを感じるようになった。

一番冷たい対応だった企業が最後にはビッグスポンサーになってくれたことは大きな成果だった。新しいこと、自分がやりたいと思ったことをガンガン進めていくのは、とても楽しかった。小遣い稼ぎでコーヒESHOPのバイトをしていたときも、接客などのルーチン業務は面白くなかったが、店長からキャンペーンやイベントの企画を頼まれると燃えた。

サークルを作る大学生は、近年急増しているが、その多くは、気の合った友人と自分たちだけのささやかな世界を作って自己完結しているもの。能崎クンのケースは、それとは一線を画すもの。枠にとらわれない発想と行動力により、メンバー集めからという「ゼロからのスタート」アルティメットという「未知への挑戦」を経ての「濃密集団への帰属」、イベントや大会企画・運営、バイト経験での「PDSサイクル」、スポンサー、他大学などを通じた「異なる価値観受容」、スポンサー対応での「挫折・葛藤」「戦い・敗北」「洗礼」と、実に多くの学習を獲得している。

【リターン】

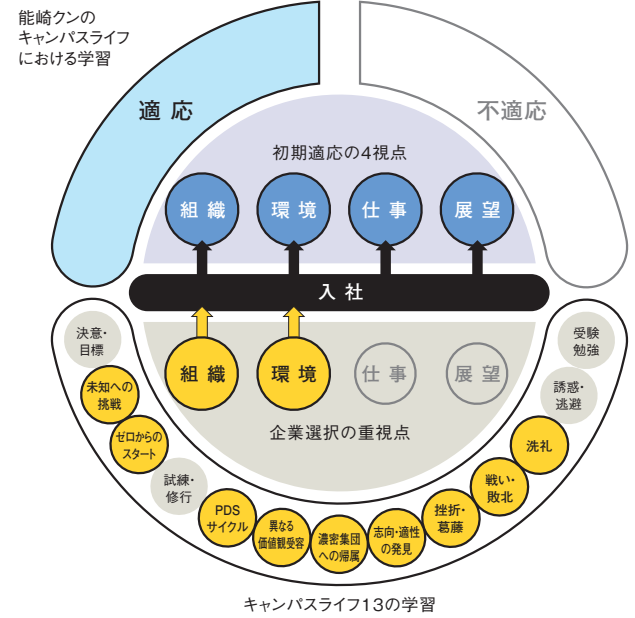
企業研究はあまりしなかった。サークルの協賛企業開拓で仲良くなった担当者から、自分がやっていることは広告業界の仕事に似ていると聞いていたので、広告業界を中心に就活を始めた。割と早い時期にある大手代理店で内定が出たのはうれしかったが、自分のやりたいことがやれるほど甘い会社ではないという気がしてきた。その頃ちょうど最終選考に残っていたIT広告ベンチャー企業は、反対に伸び盛りで新しいことをガンガンやれそうな会社だった。結局そちらに気持ちが傾き、大手は辞退した。

明確な重視点は持たずに活動しているようだが、無意識のうちに「自分が生き生きとしていられる環境」を探している。そのためには、より自由度の高い組織を選んだほうがよさそうだ、という直感が、選択の決め手となっている。

【就職先 初期適応状況】

入社後は営業部門に配属。数ヶ月先輩のアシスタントをただけで、すぐ担当顧客と業績目標を持たされるハードな職場だったが、個人の裁量性が高く、提案の新しさが鍵になる営業スタイルは向いていた。また業績が賞与に大きく反映する給与体系でもあるので、十分モチベーションを感じる事ができた。先輩社員も刺激的な人が多く職場自体も楽しい。将来のことはわからないが、順調に業績も維持しており、当面はこの会社で力をつけていこうと考えている。

「組織視点」「環境視点」の見立て通りの会社・仕事環境を獲得。キャンパスライフでの学習を十二分に生かし、速やかに適応し活躍している。キャリア展望については、やや不安を持ってはいるものの、今この時に全力で立ち向かい、次への布石を打つというブランド・ハッパン・スタイルが身につけているので、展望も自然に開けてくるものと思われる。



「大学ではラクしないようにしよう」
 「オレにもすごいところがあったんだ!」
 「バイトで先輩に殴られた。ちゃんとやれ!バイト代もらってるんだろ?」
 「体育会だけのやつと思われのはいや。クラスにも女子の中にもどんどん入っていく」

異コミュニティでの出会いや体験を次々吸収。自己理解を深め進路を確信。

渡クンのストーリー

【セパレーション】

文武両道の進学校出身。受験は最悪の結果に終わりショックを受けたが、部活を完全燃焼できたし本当に頭のいいやつはそれでも合格するので、すぐ気持ちを切り替えた。大学ではいろいろなことに目を向け自分に力をつけていこうと開き直った。

大学受験結果に強い「挫折・葛藤」「戦い・敗北」を感じているが、その結果をしっかりと受け止め、大学生活に向けての姿勢を整え、「決意・目標」を掲げている。

【イニシエーション】

何か新しいことをやってみようと思い、以前遊びでやったことがあるスカッシュサークルに入ってみた。楽しいことは楽しかったが、何のためにやっているのかあまり意味が見出せず、そのうち辞めた。

バイトも経験してみたかったのですが、最初はコンビニ、半年後からはドラッグストアで働いた。ドラッグストアの店長は試行錯誤好きで、バイトにも気軽に意見を聞く人だったため、自然とマーケティングや店作りに興味を持ち始める。同僚も、おばさんやフリーターなど今まで付き合ったことがないような人が多く、おまけに仕事もよくでき、助けられた。やがて自分もコーナーを担当するようになり、発注ミスなど失敗もしたが、就活でバイトを辞める頃にはメーカーと試験会を企画するなど社員並みに任せてもらうようになっていた。

とはいえ、バイトだけの生活にならないよう週末はスポーツ草野球を始めた。学生サークルは平日中心なので、ネットで探した社会人の草野球チーム。大学生はめずらしいためかわいがられた。仕事の話、会社組織、職場での人間関係などについて日常的に話が聞け、社会のことがだいぶリアルになった。

ゼミは、マーケティングの教授を選択。

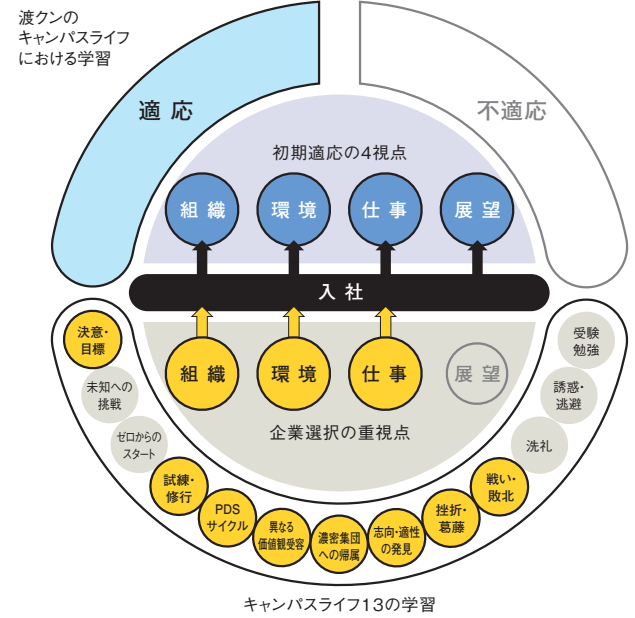
気難しいという評判だったが、自分を甘やかさないために決断。ゼミの授業はバイトで体験したことが理論的に整理されていく面白さがあり、またひとつの課題について解決方法を考え抜く勉強スタイルは、受験勉強に比べてずっと自分に向いていると思った。他のゼミ員の様子を見ていて、教授は論理的な話し方でコミュニケーションしないとイライラし始めることがわかり、それに気づいて以来うまく付き合えるようになった。4年次にはゼミ長を任される。

全方位的にさまざまな経験をしているが、一つ一つに全力でぶつかることで、多くの学習を得ている。バイト経験では、「異なる価値観受容」「PDSサイクル」「挫折・葛藤」「志向・適性の発見」を、草野球では「濃密集団への帰属」「異なる価値観受容」を、ゼミでは「試練・修行」「PDSサイクル」「異なる価値観受容」を。こうして、就職活動に至る前に、自然な形で社会に出る準備が整っている。

【リターン】

マーケティングを将来の仕事にしたいと考え、流通業界を中心に就活。ただ、業界は幅広く見ておいたほうがいいと思い、金融やシンクタンクやコンサルファームなど相当数の企業を訪問した。だが面接や選考などを重ねるうち、マーケティングで特定企業の業績を上げることよりもさまざまな企業のマーケティングを手がけるほうがおもしろそうだと思うようになり、シンクタンクやコンサルに活動をシフト。最終的にいくつかの大手コンサルから内定を受けたが、外資系のエリート感が自分のキャラとは合わない気がした。むしろ中小企業の顧客相手に若いうちから直接渡り合えると聞いた国内独立系コンサルティング会社に魅力を感じ、就職を決断。

バイト・ゼミ経験による「志向・適性の発見」をもとに、「仕事視点」であるマーケティングを基軸に就職活動を展開。情報収集を重ねる中で、さまざまな企業へのマーケティングコンサルテーションへの興味関心が芽生え、外資ではなく中小相手の国内独立系の業務内容・組織風土＝「組織視点」「環境視点」に惹かれていく。就職活動を通して、さらに自身の「志向・適性の発見」を深めている好例。



【就職先 初期適応状況】

研修後の配属セクションは、大手顧客を担当する部門。志望動機と矛盾する配属先にショックを受けたが、先ずは一通りやってみて学べることは学んでいこうと気を持ち直す。するとパーツ的な仕事でも勉強になることばかりであり、また周りの先輩たちや上司との関わりも刺激的で、充実した新人時代を過ごせた。その間の頑張りが評価され、4年目からは顧客のとあるグループ会社を主担当として任されるようになった。

当初の志望とは違う部署配属で、最初から一人で顧客を担当する、という夢が崩れたが、ここでもリセットし、主体的に仕事に取り組むことで、早期に業務・職場に適応している。大学時代を通して得られたたくさんの学習、それらによって形成されている学習スタイルが、初期適応をスムーズなものにしている。

「メンバーは、みな意識が高い。遊びたい人は入ってこない」
 「感謝されるのが好き。将来は、社会に影響を与える仕事をしたい」
 「学生気分が抜けきっていないと厳しい言われ方をした。自分は暢気に見えるらしい」
 「大学では新しいことができそう。ワクワクする」

同質集団とマニュアルどおり 成功体験。 見せかけ有能感で社会を錯覚。

一色クンのストーリー

【セパレーション】

一浪の末、第一志望群の大学に合格し、とてもうれしかった。高3のときは大学に入ってしまうと楽しめられると思っていたが、苦勞して第一志望に受かったことで、大学生活はこれをして輝いた、と言えるような有意義なものにしたいと思うようになった。今までと違う新しい自分が見つかりそうでワクワクした。

高校までは、型どおりの生活をまじめに過ごしてきた。大学という新しい世界に大きな期待感を持ち、「決意・目標」を掲げてデビュー。

【イニシエーション】

高校時代は合唱部。歌は好きだがやはり新しいことがしたかったし、まじめな活動にチャレンジしたかったので、社会活動系サークルを見て回った。そして見つけたのが国際ボランティアサークル。歴史があり活動内容もしっかりしていて、これをやり遂げられたら自分でも満足いく大学生活になると思った。

サークル活動は非常に充実していた。年間を通してさまざまな行事があり、その準備や運営で毎日忙しい。その他、賛助金を依頼するための企業訪問などもあった。賛助金集めはハードルが高く、結局1社も開拓することはできなかったが、どの会社でも自分たちの説明をしっかりと聞いてくれ、逆に活動へのアドバイスをくれることに感動した。

2年になると、恒例行事の一つにリーダーとして立候補した。高校までを通してリーダー経験は殆どなかったが、この仲間とならできる気がした。同期の仲間は皆、真面目で前向きで気が合う人ばかり。彼らの助けを得てプロジェクトは無事成功した。

勉強のほうは、サークルがあまりに充実しすぎて二の次に。ゼミもバイトも入学した当時は興味があったがあきらめた。そのせいでサークル以外には殆ど友達ができなかった。しかしお互いに歯に衣を着せずに

言い合えるような友達はそう簡単には作れるものではない。サークルで一生の宝になるような友達を得られたことは、大学生活の最大の成果だと思っている。

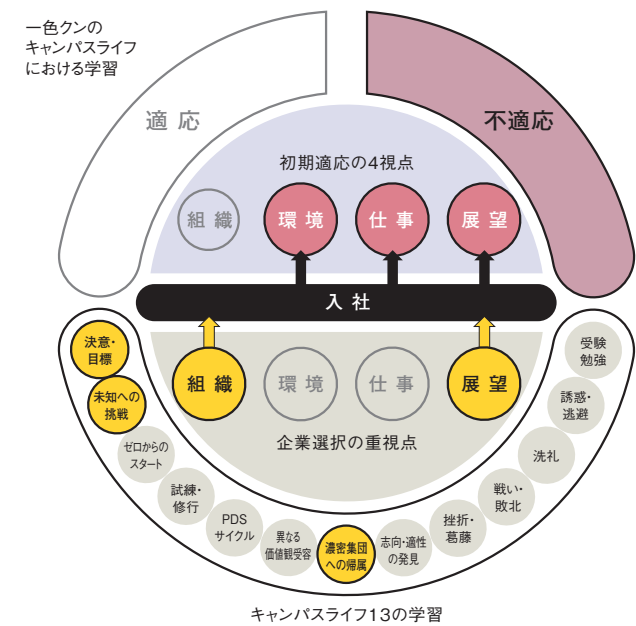
「未知への挑戦」を求め、有意義な活動をする「濃密集団への帰属」を果たす。ここで、さまざまな新しい経験によって有能感を高めていくのだが、実はその殆どが過去からの蓄積によって、うまくいくようにマニュアル化・パッケージ化されているもの。だから、試行錯誤などの「PDSサイクル」を回すことなく成功を手に行けるし、「挫折・葛藤」や「戦い・敗北」を味わうこともない。テーマパークで、冒険アトラクションを味わったようなもの。また、これまで出会ってこなかった人たちとの出会い故に「異なる価値観受容」した気にもなっているが、実は同質集団。しかし、この活動ばかりで他のコミュニティに帰属していないため、そのことに気付かない。

【リターン】

就活の話題は早くからサークル内で出ていた。特に行きたい業界はなかったが、世のため人のためになる事業をしている会社には好感を持った。かなりの社数、エントリーシート(ES)を送った。食品、エネルギー、医療、教育業界が多かった。ESは、サークルで頑張った体験がいくらでも書けあまり苦勞しなかった。

内定が取れたのは教育ソフトの会社と大手不動産。不動産は、人の人生に与えるインパクトがとても大きい商品であり、5年・10年先の自分が成長できそうだと考えた。

社会的意義・価値がある国際ボランティアでの経験から、自身の志向を「社会の役に立つ」と設定。企業のビジョン・理念にこだわり、同時に自身のキャリア展望を重視して企業選択。しかし、実社会を、あまりにきれいなものとして捉えてしまっているために、「社会の役に立つ」の実態……営利企業として利益を上げていく構図、具体的な仕事内容、どんな人が多いのかなどは、ほとんど意識していない。



【就職先 初期適応状況】

1年目はスタッフ部門に配属。受注後の事務フローなどを作成する部署で先輩のアシスタントをした。ここでの一年は問い合わせ電話をかけてきた営業社員に怒鳴られたり、指導役の先輩をイライラさせたり、あまりうまくやれなかった。2年目に異動した代理店向け Webサイト管理部門では、Webは好きだし不動産業務もわかってきたのでうまく回り始めた。ただ今度は、営業社員からひっきりなしに入るクレームがらみの電話にときどきストレスを感じることもある。それに、世のため人のためになる仕事が全然できていない。とりあえず今は、Webの専門性を身に付けられることをありがたいと思い働いている。

想定外の内勤業務、想定外のキャラクターぞろいである営業からのクレーム、想定外の人間関係。自身が思い描いていた理想空間とのあまりの差に、モチベーションは急落。これは「異なる価値観受容」の欠落に起因するもの。また、社会の役に立ちたいという志向からのギャップになやみつつも、「仕事とは、こんなもの」というあきらめも生まれ始めている。イメージ先行の展望視点を中心に据えた企業選択が、仕事に対する基本姿勢の形成を阻害している。



「経営学部は経営学のほかー、広告と幅広く学べそう。選んでよかった」
 「一生続く友人関係ができるというから、サークルは止めずに続けよう」
 「経営の不安までしたくない。大手でかつ技術的な資産を持つ会社がいい」
 「業績好調。でもこの先は肩書きが変わるだけで同じことの繰り返しでは？」

キャリア意識から 功利的体験づくめ。 大学生活で自分の核、みつからず。

腹黒木クンのストーリー

【セパレーション】

大学は第二志望グループの一枚。大学のランクは下だが、合格した学部は偏差値の高い学部だったので、どちらかという満足を感じて入学した。大学では自由で都会的な生活を満喫するとともに、憧れのマスコミへの就職を意識し、より有利な実績を積めるよう賢い選択をしていこうと決意する。

高いプライド。だから、偏差値重視。一方で、第一志望に落ちてでも、自分のプライドが傷つかない理由を見つけるのもうまい。大学入学時から、将来のキャリアを意識して、有意義な経験をすると「決意・目標」を掲げる。つまり、大学生活とは、エントリーシートでアピールする材料を獲得する場。

【イニシエーション】

まずサークルを探した。高校時代はテニス部で活躍したが、スポーツ推薦がメインの体育会テニス部でやっても勝ち目はないので最初からあきらめた。

そして入ったのが広告研究会。子どもの頃から、テレビなど派手な世界への憧れがあり、マスコミ関連に就職したいと思っていた。広告研究会は学内ミスコンなどのイベントやフリーペーパーの発行などを行っている公認サークルで、マスコミ業界人脈も期待できた。

サークルはおしゃれな人、面白いヤツが多く楽しかった。ただ実務を仕切れる人が少なく、その点自分は要領よく回せるほうなので運営に参加するようになった。その他、インカレイベントの企画・運営も担当。人脈を増やすのが狙いだった。

授業は、将来 MBAを取得したくなくても不利にならないように、成績重視で楽勝科目をセレクト。サボることもあったが基本的には出席し、要領よく単位をとった。た

だし 3年のゼミだけはハード覚悟でしっかりしたゼミを選択。マスコミへの就職がかなわないときにそなえ一般企業就活で役立つと考えたからだ。具体的なビジネススキルにつながる会計学を選択した。

とりあえず英会話は上達しておきたく、1年秋から3年まで外国人が多い街のカフェでバイトを続けた。

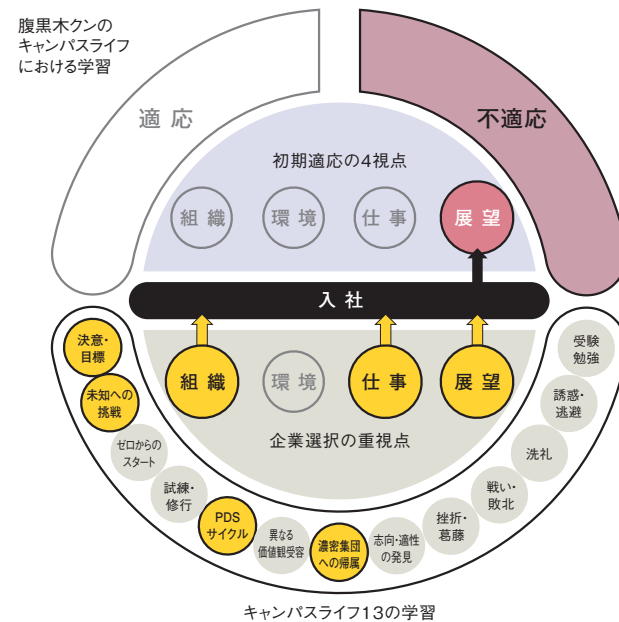
全ての行動が、何を得られるか、という功利的発想に基づいている。サークル選びも、テニスはやりたいものの、高い成果が期待できないと見て即行で却下し、マスコミ的な経験と人脈を期待して選択。授業もゼミも、そしてバイトも、全て計算ずくの選択。その結果、「濃密集団への帰属」を果たし、サークルやゼミなどでのタフな経験の中で「試練・修行」や「PDSサイクル」を獲得。一見するととてもいい経験だが、功利的発想が強いために、失敗するような選択はしないため、「挫折・葛藤」「戦い・敗北」はもともと避けてしまっているし、多様な人たちと出会い「異なる価値観受容」したつもりでも、マスコミ志望の特定キャラクター集団の中にとどまっている。

【リターン】

マスコミは、テレビ局と広告代理店を中心に活動。しかし感触がよくなかったので期待するのは止め、マスコミ外にも視野を広げることにした。それでも、やはり世の中に大きな影響をもたらすような業界がいいと思い、大手、特に通信大手や IT にシフトすることにした。

就職を決めた会社は、素材メーカー大手。当初イメージになかった業界だが、新素材による技術革命の話聞きインパクトを受けた。世の中への影響力は末端メーカーで製品を開発するのと格段の差だ。

大学生活を通じ、社会に影響を与えることができる能力・資質を磨いたという自負・誤った認識が強すぎるため、そのようなキャリア展望を実現できるところを探して、脈絡のない業界探索を行い、第一志望企業を次々に変えていく。最終決定企業は、当初志望のマスコミとは、業態も仕事の実態も組織風土もまったく違う会社。自分がどのような特徴を持った人間なのかを、客観視できていないが、要領のよさと学生時代の華やかな経験で、エントリーシート作りはバッチリ。



キャンパスライフ13の学習

【就職先 初期適応状況】

希望が受け入れられ、配属は新素材推進本部。スタッフとして商品を詳しく学べたため、やがて異動した営業部門で好業績を上げる。しかし慣れとともに自分の中で仕事がルーチン化。ふと10歳年上の主任が自分と同じ業務をしていることに気づき愕然とする。

キャリアアップのために自らアクションを起こす決意をし、学生時代手つけたことがある CPA(米国公認会計士)資格に挑戦、合格。それをアピールし経営部門に異動。しかし経営の一端に触れてみると、会計知識はさほど経営陣への影響力を持たないことがわかり、無力感を覚える。今後は、資格を評価してくれる企業への転職もありうると考えている。

要領はよく、「PDSシステム」は完備しているのだから、それなりに仕事の成果は出せるのだが、功利的な捉え方が過ぎるために、日々の仕事に変化が感じられず、成長ができない、社会に大きな影響を与えることができないと思い込んでしまう。そして資格取得に邁進、異動を手に入れるも、そこでも迷走。社会人キャリアを重ねても、自身の特徴・軸を把握できていない。

「質問に対してここまで調べてくれるのか。大学の教授は親切だ」
 「バイトは止めておこう。忙しくて授業に出られなくなるのはいやだ」
 「勝敗のつくチームスポーツより記録を伸ばす個人スポーツのほうが達成感がある」
 「リーマンショック以降、お客さんに自信を持って言葉を返せなくなっちゃって」

学びスタンスの切り替え失敗。 社会適応力が 身につかないまま学業達成感。

塾谷クンのストーリー

【セパレーション】

進学高校出身。ギリギリ狙いの志望校
 ほぼすべてに落ちてしまい、万が一の滑り
 止めに不本意入学。高校時代の仲間う
 ちで一番下の大学になってしまったのがや
 はり悔しく、勉強では、せめていい成績を
 とっておきたいと考えていた。その他は特
 にやりたいことはなく、サークルやバイトな
 ど人並みのことは経験するつもりだった。

授業では、大学教授の献身的な指導に
 好感を感じる。授業中の質問に対して個
 別に研究室に呼んで指導してくれたり、要
 点をまとめたプリントをテスト前に配ってく
 れたり、勉強のしがいがあった。授業にも真
 面目に参加し、1年、2年と成績優秀者と
 して学部表彰を受ける。3年からは授業で
 よく話をしていた先生のゼミに入った。ゼミ
 でディスカッション慣れたことは就活で役
 立った。

サークルは週1回で余裕があったので、
 TOEICに挑戦することにした。サークルの
 メンバーが実は留学に向けて勉強していた
 り、米国公認会計士を目指してダブルス
 クールに通っていたりとそれぞれ頑張っ
 ていることを知って刺激を受けたからだ。留
 学などへの憧れもあったが、より確実に力

もともと勉強好き。受験勉強も嫌いで
 はなく、頑張ったのだが、成果は残せ
 ず。その失敗の汚名返上のためにも、
 勉学には力を入れようと「決意・目標」
 を掲げる。

【イニシエーション】

入学後はまず友達作りのため、そして彼
 女作りのため、サークルを探す。シーズン
 スポーツサークルと英会話サークルで迷っ
 たが、英会話のほうが賢そうな人が多く、
 興味を持った。

授業では、大学教授の献身的な指導に
 好感を感じる。授業中の質問に対して個
 別に研究室に呼んで指導してくれたり、要
 点をまとめたプリントをテスト前に配ってく
 れたり、勉強のしがいがあった。授業にも真
 面目に参加し、1年、2年と成績優秀者と
 して学部表彰を受ける。3年からは授業で
 よく話をしていた先生のゼミに入った。ゼミ
 でディスカッション慣れたことは就活で役
 立った。

サークルは週1回で余裕があったので、
 TOEICに挑戦することにした。サークルの
 メンバーが実は留学に向けて勉強していた
 り、米国公認会計士を目指してダブルス
 クールに通っていたりとそれぞれ頑張っ
 ていることを知って刺激を受けたからだ。留
 学などへの憧れもあったが、より確実に力

になるTOEICに全力を傾けることにした。
 毎年100点アップを目標に900点を目指す
 ことに決めた。

アルバイトについては、学年表彰で報
 奨金をもらっていたこともあり、ほとんどやら
 なかった。

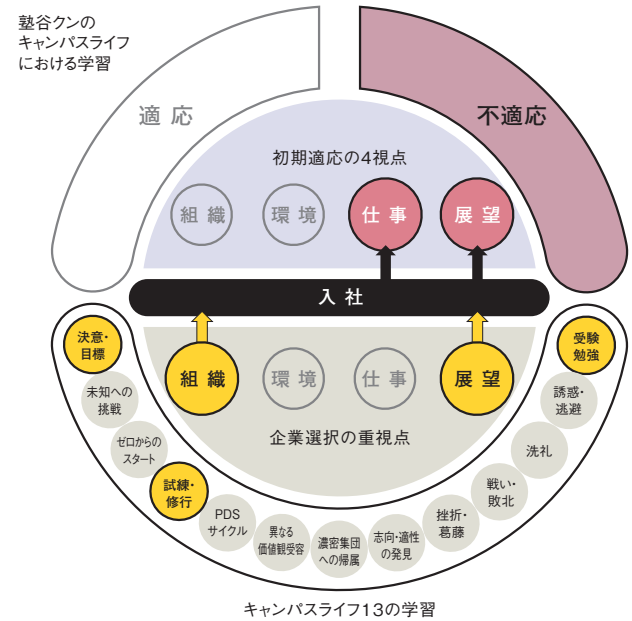
学生の本分である勉学にいそしんだの
 は高く評価したいところだが、大学に
 入っても、「受験勉強」つまり、高い
 点数をとること自体が目的であるという
 勉強のスタイルから逸脱できない。そし
 て、真面目さ、勉強好きゆえに、高い
 成績を獲得。受験で傷ついた自身の
 プライドは回復。英語も、会話を楽し
 む、外国人との交流を広げるのではなく、
 TOEICの点数を上げることが目的。
 自身が頑張ればその分だけ結果に現れ
 る自己完結した勉学スタイルの中で、
 有能感をどんどん高めている。勉学
 で成果を収める「PDSサイクル」は回し
 ているが、他者への働きかけが一切な
 い自己完結した世界のものであり、理
 不尽な状況や思うに任せない環境での
 「挫折・葛藤」、完膚なきまでに打ち
 のめされる「戦い・敗北」を得ることもな
 い。「濃密集団への帰属」「異なる価
 値観受容」がないのはもちろんである。

【リターン】

就活の頃にはTOEIC875点を達成して
 おり、他も成績がよかったので就活を不安
 に思うことはなかった。特にやりたい仕事
 もなかったが、経済学部の就職先として
 最高ランクの金融を志望するのが順当だろ
 うと考えた。高校時代の友人もみな金融を
 目指していた。

語学を生かして外資系を狙ってもよかつ
 たが、仕事が超ハードだといわれていたの
 で止めた。商社やメーカーも見てみたが、
 最初に内定が出た大手証券に決めた。

就職活動も、受験勉強的に、社会的
 ステータスや収入が高そうな金融をセレ
 クト。大学の成績、TOEICの高得点
 から、自身は間違いなく志望業界に入
 れるはずだ、と確信している。「組織
 視点」はあるものの、仕事や環境に対
 する配慮・目配りはまったくない。



キャンパスライフ13の学習

【就職先 初期適応状況】

配属は支店のリテール営業だった。何も
 知らないで拒否感はなかったが、語
 学が生かせないのが悔しい。

配属後は、幸運にも部門内新人中ト
 プで初受注。しかしリーマンショックで大
 打撃。周囲の社員たちは徐々に取引を
 回復させていったが、自分だけなかなか浮
 上できない。営業している本人が積極
 な運用にリスクを感じており、顧客とリレ
 ーションを築くなど無理だという気がしている。
 その後支店間の異動を経ても芳しい業績
 は得られず。営業に向いているとも思え
 ず、かといって国際部門への異動の可能
 性もなく、そろそろ真剣にキャリアを考
 えるべきではないかと思始めている。

営業という、「受験勉強」的に取り組
 んでも業績が上がるわけではない世界
 の中で、苦境をどのように打開してい
 くかが全く見えていない。それを、「こ
 んな環境では、うまくいくわけがない」
 「営業という仕事は自身に向いてい
 ない」というように捉え、現実から逃
 避している。会社から、他職種への
 異動の機会を提示されていないことか
 ら、すでに「できの悪い社員」という
 烙印を押されている可能性が高い。

「どここの会社に入っても、相手に合わせてうまくやれるはず」
 「飛び込み営業のバイトを選んだのは自由にやれるから。拘束されるのは嫌い」
 「クラスメイトより先生と仲いい。自分が知らないことを知ってて面白い」
 「今まで人からこんなにも、わけもわからず怒られたことはない」

一匹狼。人にも体験にも深く関わらず自己完結環境適応力未形成。

梓井タンのストーリー

【セパレーション】

親から浪人はできないと言われていたの、大学名や学部にはこだわらず受験、たまたま経済学部合格した。だが大学生活には期待があった。大学の授業がどんなものか楽しみだったし、長い夏休みを使って海外にも行ってみたかった。高校のときの政経の先生の話が面白くて国際問題に興味を持ったのと、当時「9.11」の事件があり、いつか自分の目で現地を見てみたいと思っていた。



高校時代から、社会問題に関する興味・関心は強く、それまでは遠くにあった「実社会」に触れることができるという期待感から、大学生生活に強い「決意・目標」を掲げる。しかし、意識している「実社会」とは、国際テロや難民などの世界的な問題であり、日常的な実社会への興味・関心は薄い。

【イニシエーション】

入学当初はサークルなどにも入るつもりでいたが、特に惹かれるサークルが見つからなかった。ぐずぐずしているうちに勧誘シーズンが過ぎてしまったので、まあいいかとあきらめた。

大学の授業は期待通りだった。高校の教科書に書いてあったことが、先生独自の解釈で掘り下げられていくのが面白く、聞いていてわくわくした。授業の後、時折先生と雑談したりするのが楽しかった。

クラスメイトとは、真面目に授業に出ている人の何人かと顔見知りになったが、学校外で遊ぶなどつむむことには興味はなかった。3年から入ったゼミは期待はずれ。先生から話が聞けるというより自分でレポートをまとめるのが中心だった。

入学後すぐ、建設現場の交通誘導のバイトを始めた。旅行費用を稼ぐため時給重視。

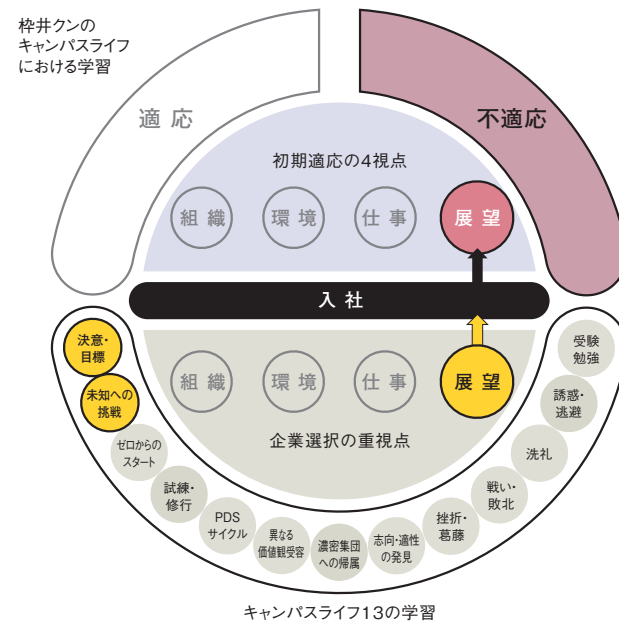
最初の海外旅行は1年の文化祭シーズン。授業もなくて暇だったから。NYのグランドゼロを見に行った。ぶらっと行って現地でお宿を探した。初めての海外旅行で戸惑いはあったが、跡地を目の当たりにした感動は大きかった。格差社会の縮図のようなNYの雰囲気にも刺激を受けた。4年間で4回海外旅行をしたが一番思い出に残っているのはアフリカ縦断旅行。経済格差や民族対立の中にあっても笑顔絶やさない子どもたちの姿が印象に残った。

近年の大学生の中には、大学という新たな環境に適応できず、「濃密集団への帰属」ができないまま大学生活を終える人が少なくないが、自らの意思であえて帰属しない、あるいは必要ないので入らない、という人も多い。後者のパターンは、行動力もあり、「未知への挑戦」に挑むのだが、一匹狼の性格ゆえか、挑戦していても、中に入り込まない。関心ある授業の教師との雑談に満足し、海外視察したことで大きなものを得た気になっている。学問の深さや国際社会の現実に関心があるが、自身の実際の経験は全くといっていいほど欠如している。

【リターン】

将来は、人を救う仕事をしたいと思った。しかし、社会貢献事業で成功するには営利企業で活躍する以上の実力が必要だと本で読んだことがあったので、まずは普通に就活することにした。主に回ったのが外資系とベンチャー企業。手取り早く成長するにはこの二つだと考えた。ESは旅行体験と企業の社会貢献について書いた。何社か落ちた末、人材系の急成長企業から内定をもらえたので、そこに入ることにした。

表層的な感動体験から、自身の「志向・適性の発見」をした気になり、また、早く成長するには外資、ベンチャーというステレオタイプなキャリア展望から、志望企業を絞り込み、企業や仕事の実態には、ほとんど関心を持たないまま企業選択。



【就職先 初期適応状況】

入社後は、営業部門に配属。企業の人事担当者や役職者と直接渡り合うことが多く、営業力をつけるのにびったりだと思った。しかしいざ仕事が始まってみると、上司はひっきりなしに『どうなっているんだ?』と呼びつけ怒鳴るし、回りも異様にハイテンションな人が多く、疲れた。売上げ優先、社会貢献のかけらも考えていないようで、職場自体に共感できなかった。

1年半後、スタッフ部門に異動になった。スタッフ部門の人たちは幾分冷静で、救われた。現在は受注後の手続きや書類管理をしている。営業社員とのやり取りでイラつくこともあるが、だいたい自分のペースででき、順調。しかし特にやりがいがある仕事でもないし、実力をつけるという目標もかかないそうもないので、このままでいいだろうかと時々考えてしまうときがある。

入社後に、パワハラまがいの叱責を受けているが、パワハラ上司だから、ではない。「異なる価値観受容」の欠落に加え、「濃密集団への帰属」の欠落が招いたことといえる。また、実力をつける、成長するという目標を掲げつつも、仕事に主体的に取り組んでいない。「PDS サイクル」の欠落がたたリ社会人になって以降も、経験からの学習ができない。

「すぐく頑張つて練習して臨んだライブ。最高の達成感」
 「単位不足で留年。でもサークルじゃフツー。もう一年いられるのがうれしい」
 「就活もバイト探しと変わらない。どうせ収入を得る場所でしょ」
 「転職活動中に初めて考えたんです。自分は何がしたいんだろうって」

サークルにのめりこむあまり ネヴァーランド化。 社会へのシフトに抵抗感。

夢園クンのストーリー

【セパレーション】

浪人の一年は受験勉強もそこそこ頑張った。そのかいあっていくつかの大学に合格。その中で一番通学の便がよい大学に入学した。自分としてはもう十分勉強したので、大学では少しのんびりし、大学生らしく自由に楽しく過ごしたいと思った。ただ、何かひとつは打ち込むものがあったらいいと思っていた。高校時代はクラスの友達とつるんで楽しく過ごしたが、考えてみると何もしなかった後悔もあった。

大学生生活への大きな期待はないが、受験勉強から解放されて自由になる時間を、ゆったりと楽しくすごそうというモラトリウムモードが、入学前に芽生えている。しかし、ただ漫然と過ごしたいのではなく、大学生らしい思い出を作りたいという欲求も。

【イニシエーション】

入学式後サークル勧誘の嵐の中で、たまたま通りかかった軽音サークルの演奏に足が止まり、音楽もいいな、と思う。楽器は特にできるわけではないが、兄がベースを持っていた。初心者も何人が入部したと聞いて自分もやってみようという気になる。サークルは人数もそれ程多くなく一見緩い雰囲気。しかしたまり場には一日中誰かがいて楽器を触ったり盛り上がったりと、意外とつながりは密。音楽だけでなくサークルのそういう雰囲気自体が居心地よくてすっかり馴染んでしまい、だんだん授業にも出なくなった。

自分のベースを買うためにバイトも始めた。いつでもすぐサークルに行けるよう、大学の隣駅のコンビニで。コンビニのバイトは言われたとおりにやるだけなので別に難しいとも楽しいとも思わなかった。

ベースが手に入ると、自分でも驚くくらいはまった。自宅でもキャンパスでもわずかな時間すら惜しんで練習。初めてのライブに成功すると、サークル没頭度はますます加速。以降卒業まで、音楽と仲間にとっぴり浸かって愉快的な大学生活を過ごす。コンテストに挑戦して入賞したりするような立派な成果はなかったが、「初心者で入部した」と言っても信じてもらえないくらいまで上達したことは自負を感じていた。

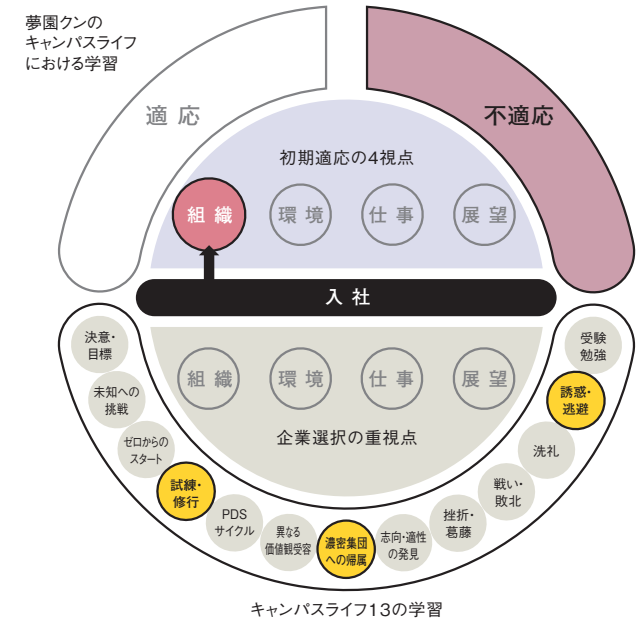
近年の大学生生活においては、軽音楽系のサークルは、遊びばかりのお茶らけサークルとは一線を画し、ストイック系に位置づけられ、まじめにはまっていこう傾向が強い。ここでも「濃密集団への帰属」を果たし、うまくなりた、という単純なモチベーションにより、日々練習するという「試練・修行」を自らに課すことに。それが高じて、学生の本分を忘れて勉学の間から消えていくという「誘惑・逃避」も。楽器熟達の試行錯誤はあるが、自己完結した世界であり、「PDSサイクル」が回るわけでもなく、バンドメンバーは流動的なので、人間関係をめぐる「挫折・葛藤」は少なく、コンテストなどへの参加による「戦い・敗北」もない。ネヴァーランドの森は、あまりにも居心地が良かった。

【リターン】

サークルがあまりにも楽しく、周りが就活に動き出してもなかなかその気になれなかった。年も明け、そろそろ始めないとまずいという気持ちもあったが、何十社も会社回りをしているクラスメイトを見て「大手ならどこでもいいのか」と揶揄しながら自分を正当化していた。

ようやく腰を上げたのが4月。楽器や音楽雑誌などどこか音楽につながる業界に就職できればいいと思ったが、どこもあっさり落ちた。6月になってやっとヤバイと思いはじめた。もう中小不動産くらいしか募集していなかったが、仕事なんてどこでやっても同じだろうと思い、給料が一番いい会社とにかく就職した。

「誘惑・逃避」は、勉学からの逃避だけではなく、実社会からの逃避でもある。だから、就職という儀式にきちんと向き合うことができない。その結果、活動開始は遅くなり、訪問社数などの活動量も少ない。企業研究もまじめにやらないため、事業内容や勤務地、給料をさらっと調べる程度で、極めていい加減に就職先を選び、決めてしまう。



【就職先 初期適応状況】

入社すると、テレホンアポイントセンターに配属された。朝から晩まで電話営業。しかも給料は歩合制。ブラック企業に就職してしまったことに気づき、3ヵ月後には退職した。改めて転職活動を開始して自分がこれまでいかに働くことについて考えてこなかったかを知る。転職エージェントに登録し相談に乗ってもらいながら、仲間とのチームワークで成果を目指すような仕事が一番自分の力が発揮できるのではないかと考える。そして数ヶ月後、首都圏郊外を中心に展開するファーストフードチェーンの店長候補職として就職。顧客はファミリー、店舗スタッフは主婦中心の地域密着店舗は自分と肌が合うようでいい雰囲気の店作りができていた。業績もまずまずである。

入ってみたら、変な会社、ダメな会社だった、という絵にかいたような早期離職のパターンのひとつに当てはまってしまった。しかし、その後は、自身の姿勢・意識をリセットし、長めの転職活動期間を経て、いい転職先を見つけ、やっと「本当のリターン」を果たす。ネヴァーランドの森から脱出するのに、大学卒業後半年かかった、大人になるのが人より遅かっただけといえる。

「大学が楽しくない。勉強は難しいし、友達もできないし」
 「店長と2人でよく話してるうちに、だんだん店のことが面白くなってきた」
 「人を避けていてもよくないかなあつて思い始めた」
 「素の自分に興味を持ってくれたんだから、価値観が合うはず」

大学デビュー失敗を きっかけに自己理解促進。 心地よい環境重視の姿勢に。

温水クンのストーリー

【セパレーション】

第一志望の大学に落ち、受かった中で一番偏差値が高かった大学に入学した。学部も受験しやすいところを選んだだけで、特に学びたい学問というわけではなかった。高校では剣道部で頑張ってきたが、大学体育会でやれるほどの実力はなかったので入らなかった。一応他のスポーツや文化系のサークルも回ってみたが、高校の部活に比べいい加減な感じがして入る気にならなかった。

典型的な偏差値重視受験。大学生活にさしたる期待感もなく、高校生活をリセットすることなく、その延長にあるような感覚で大学生活をスタートさせている。つまり、「旅立ち」していない。

【イニシエーション】

冷めた気分で入学したせいか、クラスメイトに溶け込もうという意欲がわからない。授業は専門的すぎて面白くないし、つるむ友達もいないので、次第にキャンパスから足が遠のく。入学祝に買ってもらったパソコンを家でいじっているほうが楽しい。気がつくと軽い引きこもりのような状態になっていた。

1年が終わる頃、このままではまずいと思い始めていたところに、町の小さな個人塾のバイト募集の張り紙を見つける。話を聞いてみると教員を定年退職した塾長が1人で小学生たちを教えている、アシスタントを募集しているという。アシスタントなら自分にもできるかと思いバイトを始めことにした。

塾長は70歳になるというのにまだ果敢に指導方法を模索している情熱的な人で、教材なども手作りしていた。この年になってこんなに頑張っている人がいるのを知って驚いた。塾長の話は面白く、自分でも子どもへの教え方やよい教材についていろいろ考えるようになる。ネット検索で素材を探したり、テキストを見やすく工夫してまとめたり、パソコンを使って自分なりに塾長を補佐した。

3年からは就活も始まるし、人を避けていても仕方ないので真面目に授業に出る決意をする。難しいと聞いたIT経済のゼミにも入った。自分と似たような学生が多く居心地がよかった。ミーハーなゼミを避けてよかったと思う。

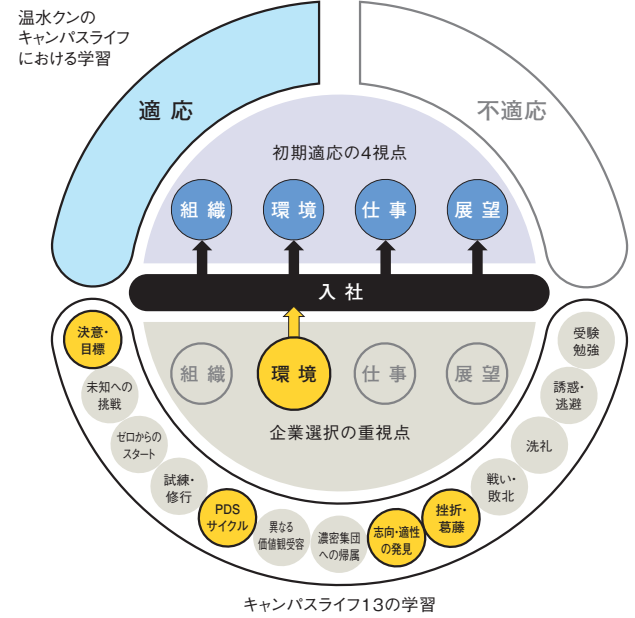
大学入学時の「セパレーション」未遂から、人間関係構築に失敗し、引きこもりに＝「挫折・葛藤」。復活(旅立ち)のきっかけは、バイト先の塾長＝師との出会い。彼に動機づけられ、試行錯誤を繰り返し、手応えを得るなかで、自身の「PDSサイクル」を入手。その自信から、キャンパスへ復帰し、学びにコミットしようと「決意・目標」を確立。選択したゼミで、キャンパス内に初めて居場所を見つける＝「志向・適性の発見」。

【リターン】

自分の場合、せめて真面目にやらないと就活は厳しいと思い、早くから会社説明会に通い始める。業界も職種も特に決めていなかったが、いくつか回るうちに営業職は自分に向いてないと思い始める。就職課で卒業生を紹介してもらい、10人近くOB訪問。その中でIT業界やSEの先輩にはなんとなく気が合うような感じがしたため、それらの業界・職種に興味・関心を抱くようになる。

後半になってようやく2社内定をもらった。両方ともIT系。就職を決めた独立系IT企業の面接では、自分の欠点を聞かれて、つい正直に人とつるむのが苦手なことを話してしまい失敗したと思っていたが、素の自分を見せての内定なので間違いのないと思った。

業界や規模知名度＝組織視点にはほとんどこだわらず、自分に向いているか、あっているか＝環境視点を重視して探索。最後は、素の自分を受け入れてくれたという懐の広さが決め手に。SEという職種への注目も、仕事内容ではなく、どういう人とどのような関係を作っていくかが自身とフィットすると思ったからであり、「仕事視点」を重視しているのではない。



【就職先 初期適応状況】

SE研修の後配属されたのは、得意先に常駐して開発支援を行う部門。よその会社に勤務すると聞き驚いたが、課長を始め6人での常駐で、自社の先輩がすべて教えてくれるので安心した。仕事は、納期直前などは毎晩深夜帰宅の激務になるのでつらいと思ったこともあるが、先輩たちも一緒だし、大変なときはお互い助け合うムードがあるので、乗り切れる。その後、常駐先が何度か変わり、チームの規模なども変化しているが、どこの職場でも仲間と助け合うムードがあるので、この会社を選んでよかったと思っている。

仕事内容、勤務地など、考えていたものの、聴いていたものと異なる点はあったものの、入社を決め手となった「環境視点」……会社の上司・同僚からの働きかけなどが、予想・期待に違わぬものであったことで、スムーズに適応している。



適応者を生み出す学習 不適応者を生み出す学習



適応者に共通する学習サイクル

初期適応者、不適応者のキャンパスライフでの学習は、「未知への挑戦」を目指して「濃密集団への帰属」を果たす、という共通性を持っている。しかし、その後の学習には大きな違いがある。

適応者は、キャンパスライフの中で、「異なる価値観」を持つ人、あるいは集団との関与というストレスのかかる環境に身をおき、「PDSサイクル」をまわし、「試練・修行」に耐えながら、試行錯誤を繰り返す。そこ

には「挫折・葛藤」があり、敬服すべき先人からの「洗礼」や自身の無力さを知る「敗北」がともなう。そして、彼らはそのなかで自己を相対化し、自身の「志向・適性の発見」を通じて自己を形成している。適応者の八割は、就職時に環境視点を重視していたが、それは、自身が生き生きと活動できる場を、それまでの経験の中で自覚していたからだと推定できる。また、適応者の多くも抱えている入社後のギャップに対しても、それに対してどう対峙していくか、というPDSサイクルを働かせ、外部環境と自身

とのチューニングを図っている。適応者にはこのような大きな共通ストーリーがある。

不適応者に共通する「学習の錯覚」

不適応者の多くは、「決意・目標」掲げて、「未知への挑戦」「濃密集団への帰属」を果たすが、それ以降の学習が伴っていない。そこには、大きく三つの傾向がある。

ひとつは「有意義な経験をしていると思っ込んでいる」という傾向だ。本人達のインタビューでの発言を額面どおりに受け

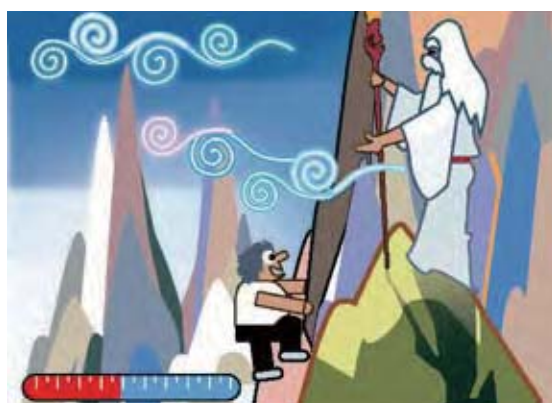
止めれば、もっと多くの学習をしていることになるが、仔細に聞き込んでいくと、それは本人の思い込みに過ぎないということが多々あった。本人が「異なる価値観を持った人物との出会い」と思っているものが、実は同質的な人間に過ぎなかったり、「自身でPDSをまわしている」と思っているも、周囲との共同作業の一部分に過ぎず自身で意思決定を下していなかったり、過去の実績を踏襲すれば成功することが予測されるパッケージ的、マニュアル的なプロジェクトであるのに自身で全てを仕切ったつもり

になっていたり、大きなイベントであるが故にその達成感に酔いしれ根拠のない有能感を抱いたり、ということだ。つまり、学習機会ではないのに、学習したと思っ込んでいるということだ。あえて学習のカテゴリーのひとつに加えた「受験勉強」も、同じ構造を内包している。教科で高い点を取ること自体は、高く評価されるべきことだが、そのこと自体が目的化し、その結果が得点やランクという形で分かりやすく提示されるが故に、その他の有効な学習が欠落していても、自己の有能感を高めてしまう。「指

示したことしかやらない」と指摘されるいまどきの若手の裏にあるのは、スコアやランクが明示され、その道筋を示すマニュアルが提示されなければ動けないという「受験勉強」をしっかりと学習してしまった姿だ。

単一コミュニティの落とし穴

二つめは「濃密集団への帰属」がひとつに限られているという傾向である。大学では何か新しいことをやりたい、今までとは違う経験をしたい、という「自分探し」の決意を踏ま



えて、未知の世界であるサークル等にコミットする。その集団の扱うテーマ、スタンスに強く共感し、自身の大学生活の多くを占める存在になるが、構成メンバーは往々にして同質的な人間の集まりだ。アルバイトもそのサークル経由になるなど、世界が広がらない。

このふたつの傾向が顕著な例として、国際ボランティアに深くコミットした一色クンのケースが挙げられる。意義の高い社会貢献活動に従事することで自身の存在意義を確立し、イベントのプロデュースで有能感を感じるが、それは先人の功績によって

パッケージ化されたものであり、また、社会的意義が高いものであるからこそ、挫折や敗北とは無縁の世界になる。人工的に作られたテーマパークのような空間での経験が、現実への適応を阻害してしまうのだ。

ポジティブの裏にある「学習の欠落」

三つめは「挫折・葛藤を受け入れない」という傾向である。発言内容からは、明らかな挫折体験だと思われるのに、それを自己の問題として捉えずに、他者のせい、あ

るいは自身との相性のせいと相対化することで、その問題をやりすごしてしまう。学習機会がありながら、学習を避けているのだ。

こうした不適応者は、不適応者の中でもポジティブな姿勢を持っていながら迷走してしまう。有能感を持って社会人デビューを果たし、自身がやりたいことをやらせて欲しいと権利ばかりを主張する「スター願望」は、「やりたいことは何ですか」と問われ続ける就職活動にコミットしすぎることに起因するが、就職活動が始まる前に、既にその原型は形成されているのだ。



昔から存在する「オトナ未満タイプ」

不応者のタイプは上記に集約されるものではない。「濃密集団への帰属」を果たし、その集団の「誘惑」を強く受けて学生の本分から「逃避」していった夢園くんは、古くから存在するアイデンティティ形成回避型の大学生の典型だ。また、「濃密集団への帰属」を果たさず一匹狼型の梓井くんのようなケースもある。こうしたタイプは、就職活動に力が入らない。結果として選択を間違い、早期離職したり、組織になかなか

馴染めなかったりする。しかし、彼らの多くは、初期での不応を踏まえた今現在においては、良好な状態を獲得しつつある。大学生活という「オトナになる準備期間」に、オトナになることを回避し、社会人となって以降の経験の中で、少しずつ大人になっていく。積極性と有能感を持った前者の不応者とは異なるタイプである。

32人のインタビューを通して、明確になってきたキャンパスライフの学習と初期適応

の関係。この結果は、いくつかの領域をデザインすべきではないか、という問いかけをもたらすものだ。

「良質な学習をもたらす大学の講義やゼミとは、どのようなものなのか」

「良質な学習をした大学生を、どのように選抜・採用するのか」

「このような背景を持った若手社員を、どのように一人前にしていくのか」

これらすべてを、これから研究すべきテーマリストに加えることとしたい。

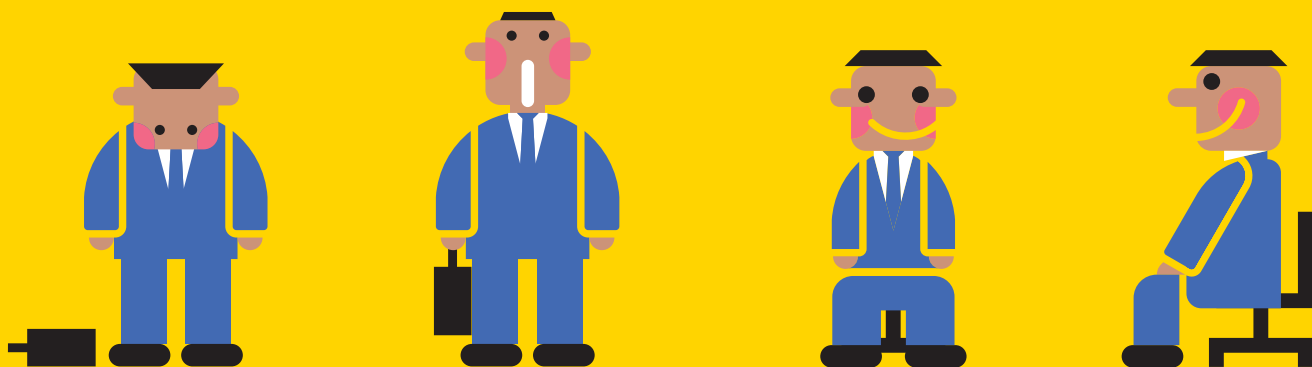
Works Report 2011

株式会社リクルート ワークス研究所

<http://www.works-i.com>

〒100-6640 東京都千代田区丸の内1-9-2

グラントウキョウサウスタワー TEL.03-6835-9240



キャンパスライフに埋め込まれた学習

何が入社後の適応・活躍をもたらすのか？